

【チャプター① 導入・談笑】

▲歩いてきた主人公が旅館の玄関の前へ

▲主人公が呼び鈴を鳴らす

(◇ヒロインボイス扉越し 次の指定まで継続)

(※距離：ちょっと遠い 方向：正面)

C① 「はーい。先輩ですよねー?」ヘ\*遠くから問いかける↙

C① 「すみません、今行きますのでー、少しお待ちください」ヘ遠くの人に呼び掛ける感じ↙

▲扉の向こうから走つてくるヒロイン

(◇ヒロインボイス扉越し 解除)

(※距離：普通 方向：正面)

B① 「お待たせしました、先輩」

B① 「どうしたんですか？ 難しい顔して」

B① 「?」

B① 「……」

B① 「あ…。いま先輩が考えてる事、わかつた気がします」

B① 「では先にお話してしまいますね」

B① 「実は、今日から明日にかけて両親が不在なので、旅館の予約をひとつも入れてないんです」

B① 「だから、顔を見なくとも先輩が来たつてわかりました」

B① 「（クスッと笑う）これでどうでしょう？ 答えになつてますか？」ヘ\*いたずらっぽく↙

B① 「（クスッと笑う）やっぱり当たつてたんですね」

▲間

B① 「なので、今日は先輩の貸し切りです。

私がちゃんとおもてなししますから、楽しみにしていてくださいね」

B① 「さあ、はやくはやく。中に入つてください」

### ▲主人公玄関の中へ移動

#### ▲少し間

B① 「(クスッと笑う) 2年ぶり…ですよね」へ\*優しく↙

B① 「はい、わたしが高校1年生の時に会ったきりですから」「先輩、なんだかあの頃より身長が伸びたように感じます」

B① 「(クスッと笑う) それはきっと本人だから気付かないんですよ」

#### ▲短め間

B① 「あと先輩、頭に寝ぐせついてます」へ\*いたずらっぽく優しく↙

B① 「もしかして朝からこのままだつたんですか? もう夕方ですよ」へ\*笑いつつ↙

B① 「大人っぽくなつたと思ったのに、先輩は先輩のままなんですね」へ\*優しく↙

B① 「ちょっと屈んでください、今直しちゃいますから」へ\*優しく↙

(※距離: ほぼ耳元 方向: 右前)

A⑧ 「動かないでくださいねー」

A⑧ 「こんな感じで…」

A⑧ 「少し引つ張りますよ」

#### ▲髪をなでつつ寝癖を直す

(※距離: 普通 方向: 正面)

B① 「はい。もう大丈夫です、しつかりなおりました」

B① 「? 先輩? どうしたんですか、顔が赤いですよ」へ\*笑いつつ↙

B① 「(クスッと) 都会に出てもそういう所は変わらないんですね」へ\*笑いつつ↙

#### ▲少し間

B① 「では、立ち話もなんですから。そろそろお部屋に向かいましょうか」

B① 「お履物お預かりしてもいいですか」

(◇靴を脱いで靴箱にしまう、玄関に上がる音)

▲ヒロインが踵を返す

(※距離・普通 方向・マイクと逆)

「それではご案内させていただきます」

B①

▲以後、部屋まで歩いていく 1Fで（縁側使うので）

「先輩のお部屋は、この廊下の一番奥になります」

B①

「（クスッと笑う）なんとなくですけど、角部屋がいいのかなーと思いまして」

(◇あと少し歩く)

(◇歩く音 停止)

▲ヒロインが主人公の方向に向きなおす

(※距離・普通 方向・正面)

B① 「到着です」

B① 「ささ、先輩、中へどうぞ」

(◇扉を開ける音)

▲二人とも部屋に入室

B① 「こちらが今日一日先輩に過ごしていただくお部屋です」

B① 「その…少し見た目は古いですが、すぐ日当たりのいいお部屋なんですよ」

(※距離・多少距離有り 方向・正面→正面奥)

B※ 「あつ、お荷物は適当に置いちゃつてください。  
今お座布団出しますんで。ちょっと失礼しますね」

※「今お座布団」辺りからB①からC①へ移動する感じでお願いします

C① 「よいしょ…うと」

▲「よいしょ」とか言いながら部屋の奥に置いてある座布団を出す

C① 「駅から」まで結構ありますけど、歩き疲れましたか？」

C① 「（笑い）へとへとですか」

C① 「では、とりあえず座つてゆっくりしてください」へ\*笑いつつ

(◇座布団を敷く音)

(◇主人公座る音)

B ① 「ちょっとお茶をとりにいってきますね」

▲ヒロインが部屋の外にお茶を取りに行く

▲お茶を持って戻ってくる

C ⑧ 「お待たせしました」

▲お茶のポットを机に置く

B ① 「麦茶を冷やしておいたんですけど、それで大丈夫ですか？」

▲お茶を取り出して、注ぐ

(※距離・普通 方向・正面)

B ① 「先輩、どうぞ」

▲短い間

B ① 「あ、では私も一杯いただきますね」

▲もう一杯お茶を注ぐ

▲ヒロインもお茶を飲む

B ① 「(お茶を飲むアドリブ)」

B ① 「はあー、冷たくておいしい。しつかり冷やしておいた甲斐がありました」

B ① 「(小さく笑い) 先輩、もう全部飲んじゃったんですか？」

(小さく笑い) グラス、かしてください」 ^\*笑いつつ^

▲グラスを取り、もう一度お茶を注ぎつつ

B ① 「確かに歩いてくると喉渇きますよね。いらっしゃい、自販機ほとんどないですし」

B ① 「はい、どうぞ」 (◇お茶を置きつつ)

▲長め間

B① 「ちょっと今更、つて感じですけど…お久しぶりです、先輩」

B① 「都会での生活にはもう慣れましたか？」

B① 「（笑い）大変なんですね」

B① 「電話やメールの文面からも疲労感が漂つてましたよ」ヘ\*苦笑い\

B① 「まあでも、こんな静かな所から一気に大都会じゃ…無理もないのかもしれませんね」

B① 「人の量とか、テレビを見てるだけでも疲れそうですし…あと満員電車とかすごく暑そうで」

B① 「はい。夏場は大変そだなーって、いつも思つてました」

▲短い間

B① 「ほんと、最近だいぶあつたかくなつてきましたよね」ヘ\*優しく\

B① 「もうじき夏が来る…つて気がして、ちょっと恐怖を感じてます」

B① 「今はこんなにガラガラですけど、夏本番にはかなり忙しくなりますから」

B① 「なんといつても、歩いて4、5分に砂浜がある好立地。

家族連れやカップルの方にはすごく人気なんですよ」ヘ\*笑いつつ\

B① 「そもそも、こんなに空いているのは今の時期くらいかもしません」

B① 「夏以外の時期も…冬は温泉で混みますし、

春も、秋も…まあ、今よりは全然混みますね」ヘ\*指折り数えるような\

▲間

B① 「（クスッと）私は、今の中途半端なシーズン、好きなんですけどね」

B① 「はい。毎日のんびりつて感じで」

B① 「あ、でもそれだけじゃないんですよ？ もう一つ好きな理由がちゃんとあるんです」

B① 「うちの近くの林道を進むと小さな砂浜に出るんです、そこがこの時期すごく綺麗で」

B① 「ちょうど今くらいの時間ですかね。過ごしやすい気温なので歩いていて気持ちいいんです」

▲長めの間

B① 「??？」

B① 「先輩？」 ^\* 小声 √

B① 「…先輩？ きいてますか？」 ^\* 小声 √

▲ 間

B① 「あ（クスッと）」

「…うとうとしてる」 ^\* 笑いつつ小声 √

▲ 間

B① 「散歩じゃなくて、お昼寝の時間にぴったりなかも」 ^\* 笑いつつ小声 √

▲ 間

B① 「疲れてたのかな」 ^\* 優しく小声で独り言 √

▲ 長めの間

B① 「寝顔…なんだか可愛い」 ^\* 優しく小声で独り言 √

▲ 間

B① 「もうちょっと見てたいけど…」 ^\* 小声 √

B① 「この姿勢で寝てるのは辛そうだし、一度起こしてあげようかな」 ^\* 小声 √

B① 「よし」

▲ ヒロインが主人公の右耳側へ移動

（※ 距離：近く 方向：右側）

A⑦ 「せーんぱい、起きてください。

変な姿勢で寝てると身体痛くなっちゃいますよ」 ^\* 優しく呼び掛けるように √

（◇上記「せーんぱい」部分で肩を軽く叩く）

▲ 短い間

▲ヒロインがもとの位置へ戻る

(※距離：普通 方向：正面)

B① 「ふふっ、もう大丈夫ですか?」^\*笑いつつ^

B① 「はい。話の途中で寝てる」とに気が付きました「^\*笑いつつ^

B① 「さっきまでの話、どこまで覚えてますか?」^\*笑いつつ^

B① 「(クスッと笑いつつ) 私、結構一人で喋ってたんですね」^\*笑いつつ^

B① 「いえ、全然大丈夫です。大した話はしませんでしたから」^\*笑いつつ^

▲間

B① 「あっ、そうだ。私、いい」と思いついちゃいました「^\*少しばしゃぐような^

B① 「先輩、そこの引き戸を開けると縁側に出られるのですが、  
よろしければ一緒にひなたぼっこしませんか?」

B① 「はい。夕日がとつても気持ちいいので。

きっとお疲れな先輩にぴったりのおもてなしができると思います」

^\*優しく自信ありげに^

▲間

B① 「ありがとうございます。では、いきましょうか?」

▲立ち上がり窓際へ移動

(◇適宜 フェードアウト)

[END]

【チャプター② 縁側にて膝枕】

▲ヒロインが引き戸を開ける

▲二人とも縁側に出る

(※距離・普通 方向・正面)

B① 「こちらです」

B① 「お部屋に虫が入るといけないので、引き戸は閉めちゃいますね」

(◇先ほど開けた引き戸を閉める音)

B① 「先輩、少しだけ横になるのをお待ちいただけますか」

B① 「今枕を用意しますので」

B① 「ちょっと失礼しますね」

(※距離・多少の距離 方向・正面下)

B① 「（小声で独り言）座つて…脚をおろして…っと」ヘ\*呟くようニ▽

※言いながら正面→正面下のニュアンスで音の移動をお願いします。

▲ヒロインが独り言を言いながら縁側に座る

▲少し間

B① 「先輩、準備が整いましたので、こちらに横になつてください」

(◇上記台詞「こちらに」部分でヒロインがぽんぽんと自分の腿を叩く)

▲少し間

B① 「（困惑）？ わかりませんか？ …膝枕なんですけど」ヘ\*照れ小声▽

▲少し間

B① 「もう先輩！ にやにやするのやめて下さい」ヘ\*ちょっと照れ焦り▽

▲少し間

B① 「それに…冷静になると私も恥ずかしいんですから…早くして頂けると助かります」ヘ\*照れて小声▽

▲主人公がヒロインに膝枕をされる姿勢なるため動く

B※ 「はい。」に頭をのせちゃって下さい」

※ B①から⑧、⑦、⑥、⑤、④、③と移動する感じでお願いします。（難しい場合は要相談。）

（◇上記台詞「」部分でヒロインがぽんぽんと自分の腿を叩く）

▲主人公、右耳が下になるようヒロインの太ももに頭を乗せ膝枕

（※距離：近い 方向：片腕分くらい離れた左）

B③ 「きやつ」へ\*軽く↙

▲少し間

B③ 「だ、大丈夫です。その、痛かったとかではなく、少し頭の重さにびっくりしただけですから」へ\*照れ焦り↙

▲少し長めの間

B③ 「はじめての経験だったのでわからなかつたんですけど…膝枕つて想像していたより恥ずかしいものなんですね」へ\*照れ↙

▲間

B③ 「……」

B③ 「それで先輩、寝心地はいかがですか？」へ\*優しく↙

B③ 「（笑い）そんなにいいものなんでしょうか」へ\*笑いつつ↙

B③ 「ふふふ、喜んでいただけてるうなうので良かつたです」へ\*優しく↙

▲間

B③ 「先輩、少し目を閉じてください」へ\*囁くように↙

▲間

B③ 「ちゃんと閉じましたか？」

B③ 「????」

B③ 「あのー？」

B③ 「一つ質問なんんですけど…なんで口をとがらせてるんですか？」

へ\*疑問感きよとんとした感じ

B③ 「キス？……ちっ、違います！」

私はあたまを撫でてあげたいなって思つただけですから！」  
～\*照れ軽く怒り～

B③ 「もう、ほんとに先輩つて…そんなことばっかり考へてるんですね」

▲間

B③ 「（咳払い）あたま、触りますよ」

▲ヒロインが主人公の頭を優しくなでる

（◇以下頭をなでる音、次の指定まで継続・その他適宜）

B③ 「（クスッと）玄関でも思いましたけど、

先輩の髪の毛って、THE・男の人って感じですよね」  
～\*優しく～

B③ 「あついえ、傷んでるとかではないのですが」

B③ 「やっぱり私の髪と比べると硬いので」  
～\*優しく～

▲間

B③ 「でも先輩の髪、私は好きですよ」  
～\*優しく～

B③ 「よしよし、よしよし、よしよし、よしよし」  
～\*優しくあやす様にかなりゆっくり～

▲ヒロインが「よしよし」頭を撫でる部分、結構時間使つてください

B③ 「気持ちいいですか？」  
～\*優しく～

▲間

B③ 「ふふっ、それならよかったです」

B③ 「なんだかまつたりしますね」  
～\*優しく笑いながら～

（◇なでる音停止）

B③ 「前髪も撫でてみていいですか？」  
～\*優しく～

B③ 「では先輩、仰向けになつてください」  
～\*優しく～

B③ 「あ、恥ずかしいので目は閉じたままでよ？」

▲主人公が仰向けになる

(※距離：近い 方向：片腕分くらい離れた正面)

B① 「おー。こうすると先輩の顔がよく見えますね。目を閉じているのでなんだか新鮮です」

(◇以下頭をなでる音再開、次の指定まで継続)

B① 「よしよし、よしよし、よしよし、よしよし」へ\*優しくあやす様にかなりゆっくり

▲間

B① 「うちはなにもない古い旅館ですが、今日は先輩の疲れを癒せるよう頑張りますので、何かご希望があれば言ってくださいね」へ\*優しく

▲間

B① 「どうかしましたか？ なんだか急に考え込んでるように見えるんですけど…」

▲間

B① 「え？ もうお願ひを思いついたんですかー？」

(◇上記 エ？ の前部分で主人公の頭をなでる手を止める)

B① 「ほんとに先輩って…こういう時だけは頭の回転が早いんですから」へ\*笑いつつ

B① 「で、そのお願ひってなんでしょうか？ 私ができることであればお応えしますので、言つてみてください」へ\*笑みのニュアンスで

▲間

B① 「ふむふむ…耳かきをしてほしい？…ですか」へ\*神妙な感じ

B① 「あ、いえ、できない訳ではないんですけど…むしろ、そんな事でいいんでしようか？」へ\*神妙な感じ

B① 「はあ、男のロマンですか？ …ふふ、なんか大げさですね」へ\*笑いつつ

▲主人公が謎の力説

B① 「（クスッと）はいはい。ちゃんと伝わりました。だからもうロマンの話は大丈夫です」へ\*笑いつつ

B① 「はい。大事なお客様のご要望ですから、すぐに耳かきを用意してきますね。ほら先輩、頭を浮かせてください」

▲主人公は頭を浮かせた後に座る

B① 「はい。ご協力ありがとうございます」

▲ヒロインが立ち上がる

(※距離・1Mくらい 方向・正面)

B① 「では、少し待ってくださいね」

▲ヒロインが耳かきを取りに部屋に戻る

(◇引き戸の開閉や遠くなる足音など上記▲に付随する音適宜)

〔END〕

【チャプター③ 耳かき】

▲ヒロインが戻ってくる  
(◇引き戸をノック)

(◇下記台詞ドア越し)

(※距離：少し遠い 方向：左後ろ)

C④ 「先輩、入りますよ？」 ヘ\*主人公に確認する感じ▽

(※距離：片腕分くらい 方向：左後ろ)

B④ 「お待たせしました」 ヘ\*優しく▽

▲主人公振り向く  
(※距離：片腕分くらい 方向：左前)

B② 「…………なんか恐いくらいテンションあがってますね」

B② 「とりあえず、先輩の好みがわからなかつたので、耳かきと綿棒、あとタオルとかも持ってきてみました」

B② 「思いつく限り色々持つてきてみたのですが、これで大丈夫ですかね？」

▲間

B② 「あはははは…（引き気味）。異様に力強い肯定の頷き、ありがとうございます」

B② 「後ろ、座りますね」

▲ヒロインが主人公の後ろに座る  
(※距離：近い 方向：後ろ)

A⑤ 「では、早速ですが…はじめてみましょうか」

A⑤ 「ふふふ、そんなに喜ぶなんてつくづく変な先輩です」 ヘ\*笑いつつ▽

A⑤ 「もう口マンの説明はいいですから！ じつとしていてください」

A⑤ 「まず耳かきの前に、軽く蒸しタオルで耳を拭いていきますね」

▲ヒロインが蒸しタオルで主人公の両耳を拭く

A⑤ 「タオル、熱くないですか？」

A⑤ 「ふふっ、私のタオルなので汚れても大丈夫ですよ」

A⑤ 「もう少し強めでも大丈夫、ですか」

A⑤ 「わかりました。少し強めにやってみます」

A⑤ 「「♪」じ「♪」し……♪」じ「♪」し、♪と」 ^\* 独り言囁き^<

A⑤ 「蒸しタオルって気持ちいいですよね」

A⑤ 「なんかさっぱりした感じがするので私は好きなんです」

A⑤ 「では、そろそろ。お待ちかねの耳かきに移りましょうか」

A⑤ 「先輩、どちら側の耳からお掃除しますか?」

### ▲ヒロインが移動

B① 「では、右耳を上にして、頭を私の腿に乗せてください」

(◇上記台詞内 ヒロインが腿をぽんぽんと叩く音・タイミング適宜)

B① 「はい。膝枕付きの出血大サービスです」^\*笑いつつ^<

▲主人公が右耳を上にヒロインの腿に頭を置く

(※距離：近い 方向：右側)

B⑦ 「はじめてなので、うまくできるかわかりませんが」

B⑦ 「先輩、目を閉じてください」

B⑦ 「最初は普通の耳かき棒ではじめます」

B⑦ 「いいですか？ 絶ツ対動いちゃダメですからね」

▲ヒロイン耳かきを開始 ※勢いよくではなく、ゆっくり恐る恐るやる感じ

(◇ゆつたりした耳かき音 指定があるまで継続) ※時間を使ってください

B⑦ 「痛いときは遠慮せず言つてください」

### ▲(耳かき)

B⑦ 「なんだか不思議です」

B⑦ 「先輩のほうが年上なのに、お母さんになった気持ちになるというか」^\*優しく^<

B⑦ 「これが母性本能というもののなかもしれません」 $\wedge$ \*笑いつつ優しく $\vee$

B⑦ 「（クスッと）耳かきに女のロマンもあったみたいですね」「

B⑦ 「あーもう！暴れないでください。暴れると刺さっちゃいますよ」

B⑦ 「（ため息）ロマンなんて言つた私がバカでした」

▲（耳かき）

B⑦ 「あ、先輩、ちょっと顔を近づけますね」

（◇耳かき音 一回停止）

▲ヒロインの顔が主人公の耳元付近へ移動

（※距離：耳元 方向：右側）

A⑦ 「奥の方が暗くて少し見えづらかったので」 $\wedge$ \*優しく $\vee$

A⑦ 「あと、今顔がすごく近いので、絶対に目を開けないでください」 $\wedge$ \*照れ $\vee$

（◇耳かき音 再開 奥の方まで 適宜）

A⑦ 「やっぱり近づくとよく見えますね」 $\wedge$ \*軽い驚き $\vee$

A⑦ 「あっ、こい」 $\wedge$ \*独り言囁き $\vee$

A⑦ 「ふう」 $\wedge$ \*独り言囁き $\vee$

A⑦ 「もう少しでとれそう」 $\wedge$ \*独り言囁き $\vee$

A⑦ 「やった」 $\wedge$ \*独り言囁き $\vee$

A⑦ 「よし、こんな感じかな」 $\wedge$ \*独り言囁き $\vee$

（◇耳かき音 一回停止）

▲ヒロイン耳かきから綿棒に持ち替える

（※距離：近い 方向：右側）

A⑦ 「では先輩、今度は綿棒で軽くふき取りますね」 $\wedge$ \*優しく $\vee$

▲耳かき（綿棒）

(※距離・耳元 方向・右側)

A⑦ 「やはり耳かきと綿棒では違いがありますね」へ\*納得するような感じ▽

A⑦ 「綿棒は表面の掃除が簡単といいますか…」

A⑦ 「（クスッと）耳掃除って意外と奥が深いのかもしません」へ\*笑いつつ▽

▲耳かき（綿棒） 右耳終了

(※距離・近い 方向・右側)

A⑦ 「右耳は綺麗になつたと思いますので、今度は左耳に…」

▲主人公がヒロインの腿上で急に逆を向く

(※距離・近い 方向・右から左)

A※ 「（驚き）きやつ！ ちょっと！」へ\*小さく▽

※ A⑦から⑧、①、②、③と移動するような感じでお願いします。（難しい場合は要相談。）

(※距離・近い 方向・左側)

B③ 「もう先輩！ 急に頭を動かいでください！ いきなりだとびっくりするんですから」

B③ 「はあ、まだそのテンションのままだつたんですね」

B③ 「まったく…では左耳もはじめますよ」

▲ヒロインの顔が左耳付近へ

(※距離・耳元 方向・左側)

（※距離・耳元 方向・左側）

A③ 「今度は最初から近づいて…っと」へ\*囁くように独り言▽

（◇耳かき音 開始）

A③ 「（クスッと笑う）息があたつてくれすぐつたくても我慢してくださいね」

A③ 「先輩、今更ですけど、私の耳かきはいかがでしようか？」

A③ 「（クスッと）ありがとうございます。それが本当なら、凄腕ドクターになれそうですね」

A③ 「でも、手先の器用さにはあまり自信がなかつたので…素直に嬉しいです」へ\*笑いつつ▽

A(3) 「この調子で頑張りますね」

A(3) 「見つけた」ヘ\*独り言囁き∨

A(3) 「この奥に大きめのが」ヘ\*独り言囁き∨

A(3) 「あと少し」ヘ\*独り言囁き∨

A(3) 「とれたとれた」ヘ\*独り言囁き∨

A(3) 「うん、きれいきれい」

(◇耳かき音 停止)

(※距離：近い 方向：左側)

B(3) 「そろそろ、また綿棒に持ち替えます」

▲ヒロインが綿棒に持ち替えて、耳かき再開

(耳かき音 (綿棒) 開始)

(※距離：耳元 方向：左側)

A(3) 「綿棒ってほんとに細かい汚れも取れるんですねー」

A(3) 「あまり意識していなかつたので驚きました」

▲耳かき

A(3) 「こここの溝をこすって」ヘ\*独り言∨

▲耳かき

A(3) 「こんな感じで…つと」ヘ\*独り言∨

(◇耳かき音 (綿棒) 停止)

(◇ヒロインが手を叩く)

(※距離：近い 方向：左側)

B(3) 「先輩、お疲れ様です。左耳も綺麗になりましたので」

B(3) 「え？ (クスッと) 緊張してたんですか？」

とてもそんな風に見えませんでしたけど」ヘ\*笑いつつ∨

B③ 「私は最後の方、かなり集中しちゃつてました」

B③ 「そうだ！ 一度身体を伸ばしましょうか」ヘ\*笑いつつ↙

B③ 「では先輩、頭ずらしますよー」

▲二人とも立ち上がりつて伸び

(※距離：普通 方向：正面)

B① 「ん———」ヘ\*伸び長め↙

B① 「（息を吐くアドリブ）」ヘ\*力が抜ける感じの短めの『はあ』↙

B① 「こうやつて思い切り伸びると、すつきりしますよね」

B① 「ふう。ではそろそろ最後の仕上げに移りましょうか」

B① 「先輩、こちらに座つて下さい」

B① 「ふふつ、残念そうですが、もう膝枕はおしまいです」ヘ\*いたずらっぽく↙

▲主人公が座る、ヒロインはその後ろに

(※距離：近い 方向：後ろ)

A⑤ 「準備できましたか？」

A⑤ 「ではまず、濡れたタオルで後ろから耳を拭きますね」

▲ヒロインが濡れたタオルで軽く両耳を拭く

A⑤ 「細かい汚れもしつかりとつて」

A⑤ 「耳の穴に少し指をいれますねー」

(◇濡れタオルで拭く音 停止)

A⑤ 「あとは最後に乾いたタオルに持ち替えて」

▲ヒロインが乾いたタオルで軽く両耳を拭く

「軽く拭いて…っと」

(◇乾いたタオルで拭く音 停止)

A⑤ 「おしまいです」

A⑤ 「お疲れ様です、先輩」

▲主人公が振り向く

B① 「あ、いえいえ、お礼なんていらないですよ」

B① 「なんだかんだ私も楽しんじゃつてましたし」ヘ\*優しく↙

B① 「…それに、先輩の甘えん坊さんな一面も見れましたから」ヘ\*いたずらっぽく↙

B① 「ふふっ、今更照れてももう遅いです」ヘ\*優しく笑いつつ↙

▲間

B① 「そろそろ日も落ちてきましたし、少し早いですが戻つてお夕飯にしましょうか」

B① 「はい。私もお腹減つてきちゃいました」ヘ\*笑いつつ↙

B① 「もう仕込みは終わらせてありますので、すぐお持ちできますよ」

B① 「(クスッと) お口に合うと嬉しいのですが」ヘ\*笑いつつ↙

B① 「では、使つたものを全部持つて…っと」ヘ\*独り言っぽく↙

▲ヒロインが使つたものを片づける

B① 「よし。お待たせしました先輩、では戻りましょうか」

▲一人で部屋に戻る(適宜フェードアウト)

[END]

【チャプター④ 食後の談笑】

(◇箸を置く音)

▲一人で食事を終わる 一人とも座ってる

(※距離：普通 方向：正面)

B① 「うごちそくさまでした」ヘ\*ゆっくり∨

B① 「もうお腹いっぱいですー。ちょっと作りすぎちゃいましたかね」ヘ\*満足そうに∨

B① 「お味のほうはいかがでしたか?」ヘ\*疑問系∨

B① 「(クスッと) 本当ですか? それなら頑張った甲斐がありました」ヘ\*嬉しそう∨

B① 「今日の献立は以前母に習ったものなので、多少自信があったはずなんんですけど…」

B① 「いざ食べていただくとなると、やっぱり不安で(安堵の笑い)」

B① 「だから先輩に『美味しかった』って言われてホッとしました」ヘ\*安堵∨

B① 「はい、素敵なお嫁さんになるために、これからも精進あるのみですね」ヘ\*嬉しそうに冗談∨

▲間

B① 「先輩はこの後どうしますか?」

B① 「ふむふむ…。

今日は疲れたからお風呂に入つたらすぐ寝る……ですか」ヘ\*小声で思案しる感じ∨

B① 「あ、いえ。なんでもありません

とっても健康的なご予定だなーって思つただけです

ヘ\*「とっても」部分いたずらっぽく∨

B① 「食器、さげちやいますね」

▲ヒロインが立ち上がり、食器を片づける

(※距離：近く 方向：正面)

B① 「先輩の食器も一緒に…と」

▲主人公の食器をヒロインが片づける

▲それなりに時間使った間

▲まとめた食器を部屋の入口へ運ぶ

(\* 距離・少し遠め 方向右奥)

C⑧ 「では、台所に運んできますね」

(◇引き戸を開ける音)

▲ヒロインが部屋を出ようとして立ち止まる

C⑧ 「あの、先輩?」ヘ\*小声\

C⑧ 「よろしければ、食後にお散歩なんていかがでしようか?」

C⑧ 「お疲れのところ、急なご提案なのはわかつてんんですけど…」

C⑧ 「せっかくなので、一応訊いてみようかと思いまして」ヘ\*自信なさげに笑いつつ\

▲間

C⑧ 「え…? 耳かきのお礼…ですか?」

ありがとうございます。すごく嬉しいです」ヘ\*「お礼…ですか?」部分まで小声\

C⑧ 「では、食器を片付けてすぐ支度してきますので、待ち合わせは玄関でお願いします」

▲ヒロインが急いで食器を下げに部屋の外へ

▲部屋の外の廊下途中でヒロインが立ち止まる

(※距離・遠い 方向・適宜)

C⑧ 「せんぱーい! 一つ仕事を忘れていました!」ヘ\*遠くから話す感じ\

C⑧ 「すみませんが十分後に玄関でお願いします! 終わり次第すぐ行きますでー」ヘ\*遠くから話す感じ\

▲ヒロインが主人公から離れる

(◇適宜フェードアウト)

[END]

## 【チャプター⑤ 夜の散歩】

※波の音が入ります シーンに合わせて適宜調整お願いします

▲玄関前にて主人公・ヒロイン待ち合わせ

▲ヒロインが小走りで主人公の所に向かってくる

(※距離・普通 方向・正面)

B① 「（呼吸）すみません先輩。遅くなりました」へ\*慌ててきました感じ▽

B① 「（呼吸）今呼吸を整えますから」

B① 「（深呼吸アドリブ）」

B① 「はあ。ちょっと急ぎすぎちゃいました」へ\*笑いつつ▽

B① 「????」

B① 「どうかしましたか？ なんだか驚いてるよう見えますけど」

B① 「ああ、もしかして服装のことですか？」

B① 「さすがに旅館の服のまま外には出れないで、制服に着替えたんです」へ\*笑いつつ▽

B① 「ふふ、懐かしかったですか？」

▲間

B① 「今お履物お出しますね」

▲玄関へ靴を出しに動く 主人公・ヒロインともに靴を履く

(※距離・普通 方向・正面 マイクと逆)

「電気は…付けたままでいいかな」へ\*小さく独り言▽

▲玄関の引き戸を開け外に出る

▲ヒロインが鍵を開ける

(※距離・近い 方向・マイクと逆に)

「戸締り確認、よし」へ\*小さく独り言▽

B①

B①

(※距離：普通 方向：左側)

※主人公側（マイク側）と進行方向側あり

B③ 「暗いので懐中電灯をつけてっと……では行きましょうか」

▲二人とも歩き出す

B③ 「そんなに長く歩かないでの安心してくださいね」

▲間

B③ 「うちの周り、あまり街灯がないので、足元に注意してください」

B③ 「先輩が怪我しても、私じゃ病院まで運べないですから」ヘ\*いたずらっぽく

▲間

B③ 「やっぱり夜はまだ涼しいですね。一応上着を羽織つてきて正解でした」

B③ 「先輩は寒くないですか？」

B③ 「（クスッと）私のほうが寒がりなのかもせん」

▲間

B③ 「あ、こっちです」

▲間

B③ 「先輩、ちょっと止まってください」

▲二人とも立ち止まる

（◇本当に小さく波の音）

B③ 「聴こえますか？」

B③ 「ふふふ、ちゃんと耳を澄ませてみてください。わかりませんか？」

（◇先ほどより少し大きな波の音）

B③ 「正解です。さ、あと少し歩けばゴールですから」

▲散歩再開

（◇浜辺が近くなつてくるのを表現してください 適宜）

▲目的地（浜辺）に到着

（◇歩く音 停止）

B ③ 「到着です」

B ③ 「少し休憩がてら浜辺に座りましょうか」

B ③ 「少し休憩がてら浜辺に座りましょうか」

▲二人とも移動

（◇浜辺を歩く音）

▲二人とも腰掛ける

B ③ 「帰りに電池が切れるといけないので、懐中電灯消しちゃいますね」

▲ヒロインが懐中電灯の電気を消す

▲長めの間

（※距離：近い 方向：左側）

B ③ 「（クスッと笑う） 真っ暗でなにも見えません」 ヘ\*笑いつつ＼

▲少し間

B ③ 「いつもはとっても綺麗な景色なんですよ？」

B ③ 「海に夕日が沈む瞬間とか最高なんですから」

B ③ 「本当は夕方お誘いしたかったんですけど…

「…こんな時間だからこそ、浜辺が貸し切り状態ですし」 ヘ\*笑いつつ＼

▲少し間

B ③ 「でも、こうして夜に歩くのも悪くないです」

B ③ 「…こんな時間だからこそ、浜辺が貸し切り状態ですし」 ヘ\*笑いつつ＼

▲長い間

B ③ 「波の音、落ち着きますね」

▲長い間

B③ 「先輩、もう少し近くに寄つてもいいですか？」

(◇ヒロインが主人公のそばに移動)

(距離…かなり近く 方向…左側)

A③ 「ありがとうございます。その……少し身体が冷えてしまったようなので」

▲少し間

A③ 「星が綺麗」ヘ\*独り言っぽく↙

A③ 「先輩、上、見てください。星がすごく綺麗ですよ」

A③ 「こんなに綺麗な星空が此処で見れるなんて知らなかつた」ヘ\*独り言っぽく↙

▲少し間

A③ 「先輩、今お願い事をしたら、

あの星まで届きそうな気がしませんか？」ヘ\*いたずらっぽく↙

A③ 「（クスッと）つれないですね。まあ確かに流れ星が一般的ですもんね」ヘ\*笑いつつ↙

▲間

A③ 「でもこの砂浜…地元の人の間では、『幸せを呼ぶ砂浜』って呼ばれてるんですよ」

A③ 「なんでも、近くに縁結びの神様が祭られているとかでして」

「学校のクラスでも

『浜辺で告白したお陰で結ばれたー』なんて言つてる女の子もいるんですけど」

A③ 「あー、信じてないって顔してますねー」ヘ\*笑いつつ↙

A③ 「…まあ、私もあまり信じてなかつたんですけど、結構いるんですよ信じてる人」

▲間

A③ 「都会に出ると、こんな星空は見れないですか？」

A③ 「そうなんですね。ここは何もない所だと思つてましたけど、  
意外と違うのかもしません」

▲ 間

A(3) 「やっぱりさつきの話、なんだか信じてみても良いような気がしてきちゃいました」

A(3) 「はい。神様の話です。だつて此処でしか見れない星空なんですよ?」ヘ\*笑いつつ▼

A(3) 「なんでも集まる都會にないくらいなんですから!」

A(3) 「きっと何かご利益があるに決まっています」ヘ\*笑いつつ▼

▲ 間

A(3) 「…………それとも、先輩と一緒にだからそう思うのかな?」ヘ\*小声独り言▼

A(3) 「(クスッと笑う) なんでもありません」(冗談っぽくはぐらかす)

▲ 間

A(3) 「さて、そろそろ戻りましょうか」

▲上記「さて」くらいでヒロインが自分の腿を叩く その後立ち上がる

(※距離・普通 方向・左側)

B(3) 「はい。ずっとここにいたら風邪ひいちゃいますし」ヘ\*笑いつつ▼

B(3) 「懐中電灯、スイッチON」

▲ヒロインが懐中電灯のスイッチを入れる

B(3) 「帰りも足元に注意してくださいね」

▲二人して歩き出す

B(3) 「…………なんだかちょっとびり名残惜しいな」

B(3) 「そうですね。またいつか一緒にこの夜空が見れたら嬉しいです」

B(3) 「先輩、お付き合いありがとうございました」

▲ 間

B(3) 「あつ」ヘ\*思い出したように▼

▲ヒロインが立ち止まって浜辺の方向に振り返る

B③ 「（クスッと笑う） 今日から帰る時はお礼をしなきゃと思いまして」

B③ 「砂浜の神様に、です」 (\*笑いつつ)

▲ 間

B③ 「えーっと…今日は素敵なお時間をくださってありがとうございました」 ヘ\*仰々しく↙

B③ 「あと……」

B③ 「またいつか先輩と一緒に星を見れますように」 ヘ\*すぐく小声早口↙

▲ヒロインが海に向かってお辞儀

B③ 「どうかしましたか？」 (クスッと笑う) なにも言つてないですよ」

B③ 「ほんとですって。

あー。先輩、もしかして都会の騒音で耳が悪くなつたのかもせんね」  
ヘ\*いたずらっぽく↙

B③ 「さあさあ。お礼も済みましたし、今度こそ戻りましょう」

B③ 「あつつい温泉が待つてますから」 ヘ\*笑いつつ↙

B③ 「（笑い） なんで先輩まで一礼してるんですか」 ヘ\*笑いつつ↙

B③ 「ほーら、行きますよ」

B③ 「うちの温泉、狭いですけど評判良いんですから」

▲二人とも歩き出す

(◇ 「（笑い） なんで先輩まで一礼してるんですか」 部分あたりからフェードアウト 適宜)

[END]

## 【チャプター⑥ お風呂に来訪者】

※主人公は浴場に置いてある椅子に座っている状態です（銭湯とかにあるようなやつ）

（◇始まり方は適宜調整お願いします）

▲主人公がシャワーを浴びたりして

（◇ヒロインボイス浴場の扉越し すりガラスみたいなやつです）

（※距離：遠い 方向：右）

C ⑦ 「先輩、湯加減はどうですかー？」へ\*呼びかける感じ▽

C ⑦ 「（小さく笑い）ご満足いただけてるみたいでよかったです」へ\*優しく▽

▲間

C ⑦ 「あのー先輩」へ\*呼びかける感じ▽

▲主人公がシャワーを止める

▲少し間

C ⑦ 「今からそちらにご一緒しても大丈夫ですかー？」

C ⑦ 「うーん… そうですねー（思案する）。

散歩にお付き合いいたいたお礼？ …といったところでしょうか。お背中を流せればー、と思いまして」

▲間

C ⑦ 「あ、心配しなくて大丈夫ですよ。私は服を着たまま入りますから」へ\*バツサリ▽

▲短い間

C ⑦ 「あれ？ なんだか妙に声のトーンが下がりましたけど」

C ⑦ 「（クスッと）もしかして、予想してた展開と違いましたか？」  
へ\*「もしかしてー」部分いたずらっぽく▽

C ⑦ 「ふふっ、そうですよね。

先輩がそんな事考えるわけないですよね」へ\*いたずらっぽく笑いつつ▽

C ⑦ 「では、タオルとか用意して来ますのでー」

▲ヒロインが浴場の扉付近から離れる

▲ヒロイン立ち止まる

(※距離：さらに少し離れた感じ 方向：右)

C⑦ 「あ！ あとひとつ大事なことを忘れてました」

C⑦ 「一応の確認事項ですけど、必ず前：隠してくださいねー」  
^\*笑いつつ遠くから呼びかける感じ

C⑦ 「だって、事故があつたら怖いじゃないですか」 ^\*笑いつつ

C⑦ 「それはさすがに一大事なので」

C⑦ 「見る方も見られる方も、誰も得しないですよー」

C⑦ 「ふふつ、冗談です。先輩、もしかして傷ついたやいましたー？」

C⑦ 「先輩も可愛いところがあるんですねー」

(◇「だって、事故がー」台詞部分よりフェードアウト 適宜)

[END]

【チャプター⑦ 背中流し】

(◇以下次の指定までヒロインボイス浴場の扉越し すりガラスみたいなやつです)

▲主人公シャワーを出している

(距離：遠い 方向：右)

C⑦ 「先輩、お待たせしました」

▲主人公シャワーを止める

C⑦ 「もうお邪魔しても大丈夫ですか？」

C⑦ 「ありがとうございます」

▲間

C⑦ 「あと……自分から言い出しておいて申し訳ないんですけど、出来たら目を閉じてもらつていいですか？」

C⑦ 「やつぱり背中を流している時に目が合つたら恥ずかしいので」

▲間

C⑦ 「すみません。では、失礼します」

▲ヒロインが浴場扉を開けて入る

▲その後主人公の背中側までゆっくり移動

(◇ヒロインボイス浴場の扉越し解除)

(※距離：かなり近め 方向：左後ろ)

B④ 「先輩、ちょっと顔を覗きますよ？」

(※距離：近い 方向：左前)

A② 「（クスッと笑う）、約束通りちゃんと目は閉じてくれてるみたいですね」

B⑤ 「まずは…少し冷えたかもしれないのに、軽くお湯で流します」

▲ヒロインがシャワーノズルを手に取る

▲ヒロインが自分の手にお湯をあてて温度確認

B⑤ 「これくらいで熱くないかな」

B⑤ 「流しますね」

▲ヒロインが主人公の背中にシャワーをあてる

B⑤ 「あつくないですかー?」

B⑤ 「少し背中触りますね」

▲ヒロインが主人公の背中を撫でつつ流す

B⑤ 「そろそろあつたまりましたか?」

▲ヒロインがシャワーを止める

B⑤ 「では、ボディーソープを泡立てますので、少しお待ちください」

▲ヒロインがタオルでボディーソープを泡立てる

B⑤ 「先輩は見えないと 思いますけど、このタオルはすぐ泡立ちがいいんです」

B⑤ 「私が少し使ったタオルなのが申し訳ないのですが、たぶん先輩にも満足していただける気持ちよさです」「

▲少ししてヒロインが手を止める

B⑤ 「?????」

B④ 「先輩? ……どうかしましたか?」

B④ 「(困惑) ? はい、最近はこのタオルを使ってます。なにせお気に入りですから」「

▲ヒロイン泡立てを再開

▲間

(◇泡立てる音 停止)

B④ 「先輩…耳が真っ赤ですよ…?」

(◇泡立てる音 再開)

B⑤ 「シャワーちょっと熱かったかな」^\*小声独り言▽

B⑤ 「よーし。泡立ちました。もうモコモコです」

(◇泡立てる音 停止)

B⑤ 「では、背中をタオルで擦りますね」

▲ヒロインが主人公の背中をタオルで擦る

(※距離・さらに近く 方向・後ろ)

B⑤ 「お客様へ、かゆい所はございませんか～？」ヘ\*ちょっとふざけつつ

B⑤ 「ふふっ、人の背中を流すのって結構楽しいんですね」

B⑤ 「力加減はどうでしょうか？」

B⑥ 「もっと強くて大丈夫ですか？　はい、やってみます」

B⑤ 「うーん、うーん」

B⑤ 「こんな感じでよろしいですか？」

B⑤ 「では、肩のほうもこのまま洗います」

B⑤ 「うーん、うーん」

B⑤ 「先輩の背中、大きいですね」

B⑤ 「うーんしてまじまじ見ると気が付きます」

B⑤ 「男の人って感じがして…すごくかっこいいですよ」

B④ 「ふふっ、もしかして照れちゃいましたか？」

B④ 「冗談です（笑い）ではでは、しっかり洗えたので流しますね」

B④ 「いえいえ、私も楽しかったです」

▲ヒロインがシャワーを手に取り温度調整

B④ 「先ほどと同じくらいの温度で大丈夫ですか？」

B⑤ 「わかりました。少しづねるくしますね」

B⑤ 「では、首の方から流します」

▲ヒロインがシャワーで主人公の背中を流す

B⑤ 「気持ち良かつたですか？」

B⑤ 「ふむふむ…懐かしい感じする…。ふふつ、なんとなくわかる気がします」

B⑤ 「小さい頃、私も母の背中を流した記憶がありますので」

B⑤ 「肩のほうまで流しちゃいますね」

B⑤ 「お待たせしました、おしまいです」

▲ヒロインが主人公の背中洗い終わる

(◇シャワー音 停止)

B⑤ 「お疲れ様です、先輩」

B⑤ 「もう立ち上がりついていた大丈夫ですよ」

B⑤ 「え？ ……『田を閉じていて動けない』？」

B④ 「あつ、すみません。すっかり忘れてました」

B④ 「まだ田を閉じていてくれてたんですね。ありがとうございます」

B④ 「はいはい（クスッと）先輩は約束を守る男、ですもんね」

B④ 「でももう開いていただいて構いませんよ」

▲短い間

B⑤ 「先輩……田は開きましたか？」

B⑤ 「では、そのまま、ゆっくりこちらに振り向いてください」

▲主人公が振り向く（上半身のみ）

(※距離・近い 方向正面)

B① 「（小さく笑い）びっくりしましたか？」

B① 「はい。タオルを卷いただけの恰好ですね」

B① 「あー、いま露骨に田をそらしませんでしたかー？」ヘ\*いたずらっぽく

▲主人公が正面に向きなおす

B⑤ 「ふふつ。また背中を向けちゃつた」

▲ヒロインが主人公の耳元に後ろから近づく

(※距離：耳元 方向：左耳)

A③ 「ずっとこの格好で先輩の背中を流してたんですよ（クスッと）」

▲ヒロインが主人公の耳元から離れる

(※距離：近い 方向：後方)

B⑤ 「やっぱり服が濡れると困りますからね」

B⑤ 「ほら、ちゃんとしつかりタオルを巻いてるので大丈夫ですか。こっち向いてください」

▲少し間

B⑤ 「それに……」ヘ\*いたずらっぽく↙

▲ヒロインが主人公の耳元に後ろから近づく

(※距離：耳元 方向：左耳)

A③ 「先輩にだつたら……見られてもいいですよ？」ヘ\*いたずらっぽく小声↙

▲長い間

▲ヒロインが主人公の耳元から離れる

(※距離：近い 方向：後方)

B⑤ 「（こ）らえ笑い」

B⑤ 「ぷつ（笑い）もう先輩！ 急に黙らないでください」

B⑤ 「すみません、冗談です、冗談」

B⑤ 「困った反応が面白かったので、ついいいたずらしちゃいました」

B⑤ 「（クスッと）もう機嫌なおしてくださいよー」

B⑤ 「そうだ。先輩は先に温泉につかってください。小さいんですけど露天風呂なので気持ちいいですよ」

B⑤ 「あの温泉に浸かれば、先輩の機嫌もたちまち元通り～」

B⑤ 「はい。本当です。ぜひ試してみてください」

B⑤ 「では、私も軽くシャワーを浴びたら向かいますので、お先に楽しんでいてくださいね」

(◇適宜 フェードアウト)

[END]

## 【チャプター⑧ 二人で露天風呂】

※露天風呂なので夜の野外です そんなに広い空間ではありません

▲主人公は先に湯船に浸かっている

▲ヒロインが引き戸を開ける

(※距離・少し遠い 方向・正面)

C② 「お待たせしました。ご機嫌はいかがですか？」

C※ 「ふふっ、上機嫌みたいでなによりです。

でも、相変わらず目はそらすんですね」ヘ\*「でも」いたずらっぽく↙

※C②からB②へと移動するようにお願いします。

▲上記台詞はヒロインが主人公の方に歩いて近付きつつ

(※距離・普通 方向・正面やや左)

B② 「先輩、お隣いいですか？」

B② 「私の姿が目に入らないようになら……？ ふふっ、先輩らしいですね」

B② 「うーん……あっ、では背中合わせならどうでしょう？」

▲主人公が端に移動（時計回りに90度向きつつ）

B④ 「（クスッと）ありがとうございます。」

そんなに端に寄つて狭くないんですけど……。では、失礼しますね」

(※距離・普通 方向・左側やや後ろ)

B④ 「問題ないならいいんですけど……。では、失礼しますね」

▲ヒロインが湯船に浸かる 位置は主人公の背面

(※距離・近い 方向・マイクと逆)

B⑤ 「はあ～……。気持ちいい」ヘ\*独り言↙

B⑤ 「先輩、いかがでしょう？ うちの露天風呂」

B⑤ 「少し狭いですけど、健康に効果がある温泉なんですよ」

B⑤ 「お風呂から上がるころには先輩も若返っちゃいます」ヘ\*冗談。ぼく↙

### ▲長め間

「先輩、背中をくっつけてみてもいいですか?」

「(クスッと) 意味なんてありません。ただの思い付きです」

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えて…」

A(5) 「えいっ」

▲「えいっ」の部分でヒロインが主人公の背中に自分の背中をくっつける

A(5) 「(クスッと) くつついちゃいました」

### ▲少し間

A(5) 「先輩の背中すべすべです。

「これはさつき綺麗に洗いすぎたかもしません」

A(5) 「ほら、こうやって背中を動かすとすぐよくわかりますよ」

A(5) 「すりすりー、すりすりー」へ\*ふざけつつ↙

▲ヒロインが主人公の背中を自分の背中でこする

A(5) 「きやつ! 先輩、いきなり暴れないでください」へ\*笑いつつ↙

(◇ヒロイン「きやつ」台詞部分で大きめの水音)

A(5) 「『やられたらやり返す』…? わかりました、宣戦布告ですね。そういう事ならっ…」

A(5) 「えいっ、えいっ」へ\*ふざけつつ↙

「あーー! 先輩、また反抗する気ですね!」

A(5) 「あははは! わかりましたっ! 先輩強い、強いですからっ!」

「あははは! わかりましたっ! 先輩強い、強いですからっ!」

「あははは! わかりましたっ! 先輩強い、強いですからっ!」

「もう降参、降参です! ふふつ、負けましたから!」

「ストップ、ストップですー! タオル取れちゃいますからっ!」

「\*くすぐられているような感じ↙

A(5) 「はあはあ（荒い呼吸）」へ\*笑いすぎて息切れ＼

A(5) 「…やっと止まってくれましたー」

A(5) 「（クスッと）先輩のせいで、

おしくらまんじゅうみたいになっちゃったじゃないですかー」

へ\*ふざけて笑いつつ＼

A(5) 「もう笑いすぎて一気に疲れちゃいました」

A(5) 「ちょっと呼吸を整えさせてください」

A(5) 「（深呼吸アドリブ）」

▲間

A(5) 「ふふふ、先輩も、息上がりますね」

A(5) 「ほら、背中越しに呼吸が大きいのがよくわかります」

▲少し間

A(5) 「（落ち着いてきた呼吸）」

▲間

A(5) 「ふうー。だいぶ落ち着きました」

▲間

A(5) 「ただの思い付きだったんですけど…なんだかこういうのも悪くないですね」

A(5) 「（クスッと）だって、顔を見なくとも相手を感じることができますから」

▲間

A(5) 「きっと今、先輩は小さく笑っています」

A(5) 「正解ですか？」

A(5) 「（クスッと）やっぱり。背中から全部伝わっちゃいますね」

▲少し間

A (5) 「私、今すぐくドキドキしてゐるんです」

A (5) 「（クスッと） なんででしょうね。  
さっきまで、結構慣れてきたつもりだったんですけど」

A (5) 「（クスッと） まだ少し恥ずかしいのかもしれません」

▲長め間

A (5) 「どうでした？ 今日1日の旅館で過ごしてみて」

A (5) 「そうですか。少しでも先輩の疲れが取れたのなら、お誘いしてみて正解でした」

▲少し間

A (5) 「明日の朝には、もう戻られるんですよね？」

A (5) 「……ふう、なんだかあつという間でした」

A (5) 「（クスッと） そんな…『寂しいかー？』なんて聞かれたら…  
…そりゃあ寂しいに決まってるじゃないですか」

▲間

A (5) 「だって…2年前までずっと一緒にたんですよ」

▲長め間

A (5) 「仲良かつたですよねー、私たち」

A (5) 「いつも一緒に…。なんていうんですかね？  
波長が合う？ つて感じでした（クスッと）」

「そうです、そうです。以心伝心！ なんでも分かり合えるのがすぐ居心地よくて」

「（クスッと） ほんと、楽しかったですよね…」

▲長め間

「先輩……。少し真面目な話があるんですが、聞いていただけますか?」

「ふふっ。……ありがとうございます」

▲間

「私は……あの頃の居心地の良さを壊したくなくて、2年前に考えるのをやめた事があるんです」

「先輩、なんの話かわかりますか?」

「（クスッと）……私の中で先輩がどういう存在かっていう話です」

A  
⑤

▲長め間

「漠然とになつちゃうんですけど、最初は……年上に対する憧れ？ って感じから始まったと思います」

「（クスッと）はい。いわゆる先輩と後輩って感じですね」

▲間

「そこから、だんだん仲良くなつていつて。いつの間にか一緒に過ごす時間がどんどん増えていきました」

「ふざけて笑つたり、くだらない事で喧嘩したり、あ！ 結構まじめに怒つてたこともあるんですよ？」

「そんな中で、先輩のダメダメな所も、かっこ悪い所も……それに、少しだけある素敵な所も見つけることができました」

「ふふっ。少しだけじやう不満ですか？」

▲間

「そうやって楽しく過ごしているうちに……いきなり先輩の引っ越しがあつて

▲長めの間

「最初は……ただただ悲しかったです」

A(5) 「先週まで笑顔でそこにいたのに、もう「」にはいない」

A(5) 「先輩の声を聞きたかったし、顔を見たくてしょうがなかった」へ\*涙堪えつつ

A(5) 「毎日泣いていたので、田なんかすづく腫れちゃって」へ\*涙堪えつつ

A(5) 「（クスッと）ほんと、見られなくてよかったです」へ\*涙堪えつつ笑う▽

### ▲長めの間

A(5) 「ある夜、真剣に考えました」

A(5) 「『なんでこんなに先輩に会いたいのかな』……って」

### ▲間

A(5) 「答えはすぐ簡単でした。……ほんとに、小さい子でもわかるような簡単な事」

### ▲長め間

A(5) 「…………先輩。私の気持ちって、もう伝わってますよね」

### ▲間

A(5) 「ふふつ、よかつた…………。以心伝心は変わつてなかつたみたい」

### ▲少し間

A(5) 「ただ、今はまだ……この気持ちを胸の奥にしまつておいてもいいですか？」

A(5) 「理由は聞かずに、あと少しだけ待つていてください」

### ▲間

A(5) 「その時が来たらきっと伝えますから…。  
しつかり受け止めくれると嬉しいです」へ\*優しく▽

### ▲少し間

A(5) 「あの……黙つて聞いてくださつて…ありがとうございますから…」

A(5) 「はい。やっと伝わったんだーって思うと、なんだかスッキリしました」

A(5) 「先輩って、実は優しかったんですね」ヘ＊涙を堪え笑う↙

A(5) 「ふふっ。今初めて知りました」ヘ＊涙を堪え笑う↙

▲長め間

A(5) 「……」

B(5) 「えいっ！」

▲「えいっ」部分でヒロインが主人公に水をかける

B(5) 「あれ？ やっぱり顔にお湯がかかると熱かったですか？」

B(5) 「ちょっととしんみりしちゃいましたから！  
雰囲気を変えようかと思いまして！」ヘ＊明るく↙

▲二人で水の掛け合い状態

B(5) 「さあさあ、先輩！ 優しいだけだと、やられっぱなしになっちゃいますよー？」

ヘ＊冷かしつつ笑う↙

B(5) 「それ！ もう一回！」

B(5) 「きやー、先輩が怒ったー！」

「まじめな話が台無しー？」

B(5) 「（クスッと）さあ？ どうなんでしょうね？  
さっきの話も、いつもの冗談かもしませんよー！」

B(5) 「あははは、強い、押す力が強いですー」

(◇「きやー、先輩が怒ったー！」からフェードアウトしていく感じ 小さく台詞聞こえるような)

[END]

【チャプター⑨ 就寝】

(◇ヒロインボイス部屋の扉越し、主人公仰向けで寝ている)

(※距離：遠い 方向：左)

C② 「先輩、今そちらにお邪魔しても大丈夫ですか？」

C② 「はい。では失礼しますね」

▲ヒロインが扉を開けて入室

(◇ヒロインボイス部屋の扉越し 解除)

C② 「すみません。もしかして寝るところでしたか？」

C② 「あ、横になつたままで構いませんので」

C② 「お疲れの先輩に、マッサージでもしてあげようかと思いまして」

C② 「気にしないで下さい。好きでやつてる事ですから」

C② 「それと、一応さつきお話を聞いていただいたので。  
お礼も兼ねてます」ヘ\*少し恥ずかしそうに↙

▲間

▲ヒロインが主人公の傍へ移動

(※距離：普通 方向：左)

B② 「では先輩、うつ伏せになつてください」

▲主人公うつ伏せになる

B⑥ 「掛け布団、ずらしますね」

▲主人公の掛け布団をヒロインがずらす

B⑥ 「今から腰の上に乗りりますけど…重かつたらごめんなさい」

(※距離：近い 方向：後ろ)

B※ 「よいしょ…っと」

※B⑥から⑤と移動するようにお願いします

B⑤ 「先輩？」

▲ヒロインが主人公の腰部分に馬乗り

▲少し間

B ⑤ 「その…重くないですか？」

B ⑤ 「（クスッと）ちゃんとしつかり食べてますよ？  
身長がそこまで大きいほうではないので、普通かと思います」

B ⑤ 「では、マッサージはじめますね」

▲ヒロインが主人公のマッサージ開始  
▲親指を押してほぐすようなマッサージ

B ⑤ 「最初は背中をほぐしていきます」

B ⑤ 「1、2、3、4、1、2、3、4、1、2、3、4、1、2、3、4、」  
ヘ\*すゞくゅっくりく

(◇マッサージ音一回停止)

B ※ 「次は上方にずれて…っと」  
※B⑤からA⑤に近くようにお願いします

▲ヒロインが主人公の腰の位置から更に上部へ移動

(◇マッサージ音 再開)

A ⑤ 「よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、「ヘ\*すゞくゅっくりく

※マッサージに動きが欲しいので、『よいしょ』の部分に若干マイクに近づくなど、  
ニュアンスだけでなく、音の動きもいれて下さい。

A ⑤ 「よく母にしてあげてますから、マッサージにはちょっと自信があるんです」「

▲ヒロインがマッサージの手を止める

▲ヒロインが主人公の上部から腰の位置へ移動

B ⑤ 「では次に、背中から肩にかけて叩きますね」

B ⑤ 「まずはゆっくり」

▲ヒロインが叩くようなマッサージを開始

B ⑤ 「力加減大丈夫ですか？」

B⑤ 「わかりました。もう少し強めですね」

B⑤ 「どこかこってる所ありますか?」

B⑤ 「じゃあ、肩は重点的にやっちやいます」

▲ヒロインがマッサージの手を止める

B⑤ 「よーし、では最後に、指圧のような感じで押し込みますね」

▲ヒロインが指圧マッサージを開始

B⑤ 「(力む吐息アドリブ)」へ\*押し込むような感じの息を4回×2回ほどへださい

B⑤ 「あっ、もしかして、眠くなつてきましたか?」

B⑤ 「ふふっ、ではそろそろ終わりにしましょう」

▲ヒロインがマッサージの手を止める

B⑤ 「今、どぎますね」

▲間

(※距離・普通 方向・右側)

B⑥ 「どうでしたか、私のマッサージ」

B⑥ 「ふふっ、よかったです」

B⑥ 「では、お布団かけますから、仰向けになつてください」

▲主人公が仰向けになる

▲ヒロインが主人公に布団をかける

B② 「(クスッと) 今の先輩、動きがのろのろでカメみたいです」

▲少し間

B② 「あの、先輩が眠るまで、隣にいてもいいですか?」

B② 「(クスッと) いたずらなんてしませんよ」

B② 「眠りやすいように羊か何か数えてあげようと思いまして」

B(2) 「なので、先輩は気にせず寝ちゃってください」

▲少し間

B(2) 「電気、小さくしますね」

▲小さい灯りに

B(2) 「では、隣に失礼して……っと」

※『隣に失礼して』あたりからB(2)からA(2)に移動する感じでお願いします。

▲ヒロインが主人公の耳元に移動

(※距離・耳元 方向・左側より)

A(2) 「こほん、数えはじめます」

A(2) 「カエルが一匹・カエルが一匹・カエルが三匹・カエルが……」ヘ\*冷静に\

(※距離・普通 方向・やや左側より)

B(2) 「どうしたんです？ 急に目を見開いて？」ヘ\*あつさり\

B(2) 「いえ、至ってまじめです。此処は田舎ですから、羊よりカエルのほうが合ってると思いまして」ヘ\*笑いつつ\

B(2) 「それにカエル・結構かわいいじゃないですか」

B(2) 「『羊がいい』？……ですか。

はあ。いつの間にか先輩も都会っ子になってしまったんですね」

B(2) 「あ、では間をとつて狸にしましょう。狸はごく稀に都会でも見るらしいですし」

A(2) 「えーっと、狸が一匹・狸が二匹・狸が三匹・狸が四匹・狸が五匹・狸が六匹…」

(◇上記台詞「えーっと、狸が一匹」からフェードアウト 適宜)

[END]

## 【チャプター⑩ おしまい】

(◇玄関の引き戸を開ける音)

B⑤ 「今日も気持ちいい朝ですねー」

B⑤ 「(クスッと) はい。洗濯物がよく乾きそうです」

▲二人とも旅館から外へ

▲間

B① 「先輩、お忘れ物はありませんか?」

B① 「そうですか。なにか見つけたらお電話しますね」

▲長めの間

B① 「ではでは…短い間ではございますが、当館をご利用いただき、誠にありがとうございました」  
ヘ\*仰々しくふざけつつ

B① 「ふふつ。ほんとに短い時間だったのが残念ですけど」

▲間

B① 「(クスッと) 私も名残惜しいです。……でも、きっとまた会えますから」

B① 「それまで元気でいてくださいね」

B① 「……いつも先輩の事想ってますから」

B① 「はい。メール、お待ちしてます。あ、でも、変な文章は送らないで下さいよ?」

B① 「(クスッと) 以前授業中に開いてしまった時は、ほんとに大変だったんですから…」

B① 「笑うのを必死に堪えて、もう過呼吸になりました」

▲長めの間

B① 「そろそろ……時間ですか?」

B① 「では先輩、気を付けて帰ってくださいねー!」

▲ 間

B① 「いってらっしゃいませ」ヘ\*優しく↙

▲ 間

▲主人公が背を向ける その後歩き出す

▲長め間

C⑤ 「せんぱーい！」

▲主人公が振り返る

C① 「わたし、すっごく楽しかったです！」ヘ\*遠くから呼びかける感じ↙

C① 「昨日今日の事、忘れませんから！ 先輩も絶対忘れないでください！」

C① 「会いに来てくれて、ほんとに、ありがとうございましたー！」

ヘ\*遠くから呼びかける感じ↙

C① 「電車！ 寝過ぎさないでくださいよー！」ヘ\*遠くから呼びかける感じ↙

C① 「お元気でーーー！」ヘ\*遠くから呼びかける感じ↙

(◇適宜 フェードアウト)

[END]

# 【チャプターSEC ??】

(◇駅構内の音)

▲ホームで主人公が電車を待っている

▲少し間

(◇着信音が鳴る)

▲主人公が携帯をポケットから出して電話に出る

(◇ボタン音)

(◇ヒロインボイス電話越し)

※電話へのフィルター、バイノーラル加工はミックス時に行いますので、  
通常マイク（コンデンサー等）での収録をお願いします。

A(7) 「もしもし」

A(7) 「先輩、今お電話大丈夫ですか？」

A(7) 「（クスッと）ギリギリセーフ。ではもうすぐ出発なんですね」

A(7) 「よかったです、間に合って」

A(7) 「やつぱり忘れ物がありましたよ」

A(7) 「さあ…？ なんでしょう」

A(7) 「わかりませんか？」

A(7) 「ふふっ、先輩がわからなくても仕方ありません」^\*笑いつつ^

A(7) 「私が一つお伝えする事を忘れていただけですから」

A(7) 「……」

A(7) 「実は来年、先輩が住む近くの大学を受験するんです」

A(7) 「きやつ！ もう、そんな大きな声出さないでください！」^\*笑いつつ^

A(7) 「…はい、本当です。今回は嘘でも冗談でもありません」^\*嬉しそうに優しく^

A(7) 「なので、受験がうまくいった際には、

合格報告ともう一つお伝えしなきゃいけない事がありますので」

A(7) 「…先輩、楽しみに待っていてください」

A(7) 「……」

A(7) 「（クスッと）もう先輩？ なにか喋つてくださいよー」

(◇ホーム音声『まもなく2番線に東京行き一、なんちやらかんちやらが10両編成で…』)

A(7) 「…電車、来るみたいですね」

(◇電車が来る音)

A(7) 「先輩、今から半年間、私も頑張りますから、必ず元気でいてくださいね」

A(7) 「…今度は私が先輩に会いに行きますから」

A(7) 「はい、約束ですよ。指は…電話なので切れないですけど、嘘ついたら針千本のませますからね」

A(7) 「では先輩、お気を付けて。はい、失礼します」

(◇ボタン音)

▲少し間

(◇ホーム音声『まもなく一、2番線より東京行きなんちやらかんちやらが発車となります…』)

▲主人公が電話をポケットに戻す

▲主人公が電車に乗る

(◇笛の音) ※電車発信のピーって高い音のやつ

(◇電車のドアが閉まる音)

[A-- END]